

二〇一九年八月三〇日

群青の池面を過る秋の雲
熊笹を抜け秋風の尾根に立つ
風優しなの字のの字に稲穂垂れ

菜々
智恵子
明日香

二〇一九年八月二九日

ゲリラ雨過ぎて新涼もたらしぬ
雨晴れて蜻蛉の空戻りけり
滝つぼを溢れ出て水澄みにけり
安かれと祈る郷里の秋出水
灯火親し再々読の三国志

たか子
三刀
はく子
せいじ
うつぎ

二〇一九年八月二八日

休耕田一面おおう虫の音
雨に伏す秋草径を塞ぎにけり
真葛原津波のごとく小屋を飲む
平凡という幸せや秋刀魚焼く
朝霧に全容見えぬ登山口

たかを
せいじ
明日香
たか子
愛正

二〇一九年八月二七日

ただ無為にペン回しして秋思かな
長堤や蕪村の句碑へ草の花

素秀
菜々

二〇一九年八月二六日

神領の早稲田一枚黄金色
病室に孫らのくれし秋の草
訪へば休園と札秋の蝶
冷ソーメン美味しオクラの星散らし

なつき
せいじ
たか子
菜々

二〇一九年八月二五日

流燈会母を恋しと思ひけり
夜更けまで郡上踊りの下駄の音
仕舞湯に肩の沈めば虫の声
新涼や両手たつぷり化粧水
木道の一直線や草紅葉

なつき
明日香
せいじ
満天
たか子

二〇一九年八月二四日

秋澄むや丘の上からミサの鐘

菜々

毎日句会みのる選・二〇一九年九月一日